

衰退する風景のためのスタディ

最優秀賞

JIA全国出品作品

福井 亜啓 (ふくいあたか)
千葉大学 工学部 都市環境システム学科



人が作り出した建築、都市、風景に恒久的に存在するものではなく、それらの最期のあり方について私たちは考える必要があるのではないだろうか。

日本に残された価値ある原風景。しかしそれらすべてに対して希少価値が見いだされることはなく、人々から意識されることなく消えてゆく無名の風景も存在する。石川県能登半島の突端に位置する三崎町寺家の漁村集落の浜には舟小屋の建ち並ぶ風景が見られる。集落の衰退に伴いこれらの存続が危ぶまれる中で、衰退を前提とした将来的あり方を探った。現地にて行った調査と風景の記録・観察、それらを手がかりとして単なるかたちの保存を目的としない風景に対する二つの計画を考える。浜と高台に位置する集落とのつながりを一本の「道」によって顕在化させ、消失した舟小屋の跡地に再建される一棟の「小屋」は浜での営み、活動の記憶を貯蔵してゆく。それらはいずれ風景が衰退した後にかつての記憶を体現する導として計画される。



講評
洗練させるには時間を掛けなければならない。改めてそう感じさせる作品である。

無駄を削ぎ落とした表現の持つ説得力は、克明な調査記録スケッチはもとより、展示パネルのタイトル文字も実は鉛筆画であるなど、手の痕跡にこだわった細密に裏付けられている。

提案規模は、作者が「装置」と呼ぶほどの小さく簡素な「小屋」と「道」であり、しかも手づくりの木造小屋組は朽ち、境界もなく草木に埋もれていく宿命にある。

人々の営みの証である集落の風景。その発展と衰退の歴史の中で、建築家はただ与えられた用途や必要面積をかたちづくるだけでよいのだろうか。いつの間にか消滅してしまう集落に潜む価値を洞察し、次に活かせる何かを紡ぎ出していく気運を「つくる」のも、建築家の果たすべき職能ではないか、この作品はこれからの時代を見据え、そう語りかけてくる。

ここまで創り得た思考と表現力と没頭できた時間を初心とし、「つくる」意味と実践にこだわりつけて欲しいものである。(審査委員：柳瀬 寛夫)

